

菱木川等で、いずれも霞ヶ浦の上流部で放流されています。

境川には一日に二、三万トンの工場排水があり、河川流量の約七割以上を占めています。食品関係のもが一企業しかないで、思ったよりも汚濁負荷は少ないようです。山王川は境川の約半分。二万トンの工場排水ですが、大口の食品工場と都市下水のためにみだ目にきたなく悪臭を放っています。

◇ 農業労働力の低下

昭和三五年における土浦市の農家戸数は三七二六戸、農家人口は約二万人でしたが、四五年には、農家戸数は三二五八戸、農家人口一万六千人と大巾に減少しています。この傾向は都市部のみならず全域にみられ、工業の場合と全く反対であって、農業と他産業との格差が激しくなり、農業労働力が他産業に移動したかうです。このため「三ちゃん農業」という言葉が流行しました。

農家は労働力不足を補うために機械化を進め、除草の手間を省くため除草剤を使うようになり、堆肥の代りに化学肥料が多く使用され、病虫害防除のため薬剤が多量に用いられるようになりました。一方、昭和四二年から米の生産過剰が問題となり、四五年から生産抑制が始まり、販作が奨励されて、霞ヶ浦の周辺では蓮田とするも

のが多くなりました。

このような農業事情の変化が、どの程度に霞ヶ浦を汚しているかは判断がむずかしく、見方によってまちまちですが、ある方面の関係者は農業排水を重大視しています。すなわち肥料の流失が汚染源とみなされており、農業用水の水管理については、十分な注意が必要と思われる。

◇ 豚の多頭飼育

昭和三六年に農業基本法が制定され、畜産の振興が叫ばれるようになりました。目玉商品として牛と豚があげられました。霞ヶ浦の流域では、牛はさほど伸びない代わりに豚の飼育が盛んになりました。三五年における養豚農家戸数は九七四戸、飼育頭数三三二〇頭ですが四五年には四一七戸、七六七頭と多頭飼育の傾向がみられます。

豚の汚濁負荷は人間のし尿の一五倍とみなされています。霞ヶ浦の流域では現在三〇万頭が飼育されています。四五〇万人分に相当し、県人口の二倍よりも多くの流域人口の五倍という莫大なものになります。しかし、実際には豚舎からの排水は大部分が土壌に還元されていて、一部が例外的に河川に直接放流されているので流出負荷はそれほど多くないものと思われれます。でも頭数が頭数